

さいたまここに人あり

地域でくらす

外国人とともに



ふじみの国際交流センター理事長

石井ナナエさん

先の国会で外国人労働者の大幅な受け入れが決まりました。現在でも県内にたくさんの外国人がくらししており、多くの学校で外国人が学んでいる現状が見られます。これからますます増えてくる外国人の子どもたちに対して、どのような教育が必要なのか、教育現場でも模索が続いています。ふじみ野市にある「ふじみの国際交流センター」は、地域でくらす外国人の支援をおこなっており、外国人の子どもたちが学ぶ場にもなっています。センターの理事長である石井ナナエさんにお話を聞きました。

ふじみの国際交流センターの設立

私は以前旧大井町で日本語教室を開いていました。センター設立のきっかけは、この地域で開催された外国人のための日本語学級で講演したとき、日本の社会になじめないで悩んでいる外国人の生の声に接したことです。仕事がない、ホームシックになった、結婚、離婚、子どもの教育問題などさまざまな訴えがありました。言葉の壁もあって、外国人が日常生活のなかで抱えているトラブルや、市制への要望などについては、十分理解されていないと実感しました。

活動に理解を示してくれていた仲間と1997年に4月に準備会を結成し、7月に「ふじみの国際交流センター」が誕生しました。場所は東上線土福岡駅から徒歩7分ぐらいの住宅地で、地主さんのご厚意で、家賃は破格の低料金でした。外国人と日本人が、いつでも自由に集える交流センターをつくりたいと東奔西走した日々でしたが、夢に見た事務所であり、東京都から無償で譲り受けた中古の

事務機などを運び込み、多くのボランティアの人たちと大掃除、床を掃いたり拭いたりカーペットを敷いたりしましたが、汗まみれの顔がほころんでいたのを覚えています。

2000年1月11日に、埼玉県よりNPO法人認証（県内で20番目、国際協力の分野でははじめて）が決定され、同月18日付けで浦和地方事務局川越支局で登記を完了しました。このときの法人設立総会で、私が初代理事長に選ばれました。

外国人妻の 駆け込み寺

日本人の夫と結婚した外国人の妻が、夫の暴力に耐え切れず、私のところに逃げてきたりしていたので、彼女たちの駆け込み寺や、自立するための職業訓練所をつくりたいと思ったことがこのセンター設立の目的の一つです。

日本人の夫から離婚を盾に虐待され、苦しんでいる外国人妻たちは、生活の安定と生きがいを求めて、技術や資格を身に付けたいと願っています。日本人に泣

軽んじられる外国人妻

○月○日

「子どものことで困っているんです。これから行ってもいいですか」
やっと聞き分けられるほどの日本語の電話が入ってきた。ふじみの国際交流センターへの道順を、何度も何度も説明する。1時間半もかかってやっと彼女が到着した。タガログ語も日本語も達者なエミリンさんに来てもらい、吐きだすようにタガログ語で話す彼女の通訳をもらおう。3人の子どもをフィリピンに残して、昨日日本に戻ってきた彼女は、30歳も年上の日本の夫の話をする。

2人の韓国人妻に続いて、3度目の妻として彼女が今の夫と結婚して10年が経った。建設業をしている夫は、子どもが生まれるたびに、「仕事ができなくなるから」とフィリピンに帰らせ、彼女をパートに出す。8歳、4歳、10カ月の3人の子どもは、籍も入れてもらえず、父親の顔も見ないままフィリピンの祖父に育てられ、父親である日本人からは1カ月1万円の仕送りが届くだけという。

「子どもと一緒に暮らしたい」と訴える彼女。外国人妻をなんだと思っているのだ。ふざけるんじゃない。父親としての義務を考えたことがあるのか。子どもをつくる資格があるかどうかを検査するリトマス試験紙のようなものはないだろうか。「見送り三振より空振りの三振。もしかしたら悔い改めてくれるかもしれない。わからず旦那を説教に行こう」と立ち上がった我々ボランティアの意思に反して、「そんなことをしたら私がひどい目にあります」3時間も涙を流して訴えた彼女は、すすぐと帰っていった。このままでは絶対いけないことが、明日からも続けられるのか。女性が経済的に自立し、言いたいことが言えるようになることの難しさをまざまざと感じた。

（石井ナナエ「見送りの三振より、空振りの三振—ふじみの国際交流センター—日記—」より）

かされる外国人妻をこれ以上増やしては
いけないと思いました。

アメリカの国務省が「日本では、外国
人女性の人身売買が横行している」とし
て、日本を「要警戒国」に位置づけまし

た。続いて、国際労働機関が日本人の性
風俗業界でおこなわれている外国人女性
の人身売買の実態をまとめた特別報告書
を作成し、「東南アジア・南米・東欧の
女性が日本で人身売買の被害にあってい



る」と興業ビザによる被害を指摘しあした。

70年代、日本人の買春ツアーが世界的に響きを買った、それならば女を日本に呼ばよ、とできたのが興業ビザだといえます。はずかしい話です。彼女たちの多くは、3カ月の滞在期間中に日本人男性と結婚。ひらがなも読めないうちに妊娠し、乳幼児健診で漢字だらけの問診表にとまどう経験をしています。日本でくらすなら、日本語を読めたり、書けたり、日本語で自分の気持ちを表現できたりする必要があります。本来このような人

は、日本語の学習を義務づける必要があると思いますが、それができていないため、交流センターのような施設が必要なのです。

子どもたちの学習の問題

県内に居住する外国人の数は年々増えています。言葉の壁が日本における生活のあらゆる面で外国人のくらしの支障になっています。日本語がわからないという問題は子どもたちも抱えています。学校に行っていない子どもたちのなかには、日本語ができなくて学校に入れない子、親の生き方や考え方に翻弄されている子、「日本語は難しい」と最初からあきらめている子、勉強と聞いただけでそっぽを向いてしまう子などさまざまですが、そんな子どもたちに学ぶことの楽しさや大切さを伝えるのが私たちスタッフの役割です。

ここでは、毎週土曜日に「国際子どもクラブ」を開いています。学校の授業についていけない子や、「学校に入りたい

Sさんの主張

Sさんはアフリカ生まれのイギリス人。小さいときから臭いとか黒いとか言われて育ってきた。成人して世界中を旅行するようになり大勢の人に出会い、人は皆平等だと教えられたという。日本に住んで三年。今でも「黒」とか「帰れ」とか言われるらしい。そんな時彼女は「肌の色とか性で人を差別するのは良くない。日本は今、世界のリーダーなのだから、もっと平和や平等・自然の大切さについて考えてほしい。子どもの教育しだいで社会は大きく変わるはず。母親の力よ」と言い返す。

(石井ナナエ「見送りの三振より、空振りの三振ーふじみの国際交流センター日記ー」より)

なら日本語がわかるようになってからきてください」と言われてしまった子どもたちに日本語を教えています。外国人の子どもたちにとって日本の学校は義務教育ではないので、日本語ができないと入学させてもらえないのが現実です。親か

らの相談内容でいちばん多いのが、日本語支援や学習支援、学校との連絡など教育に関することです。

学校に行かずに同国人同士でたむろしている外国人中学生のことが心配になったことがあります。フィリピン人のスタッフに相談したところ、「彼らは日本語だらけの授業についていけない。働ける年齢になるのを待っている」とのことでした。日本語の読み書きができないと、就ける仕事は極端に限られてしまいます。社会はもともと本気で彼らの学習の権利について考えなければいけないと思っています

外国人ルーツの子どもが日本で働き、日本に税金を払える大人になるように、犯罪などを起こさないように私たちスタッフはたくさんの課題と責任を背負っています。将来の目的を持つている子はしっかり勉強していますが、学校ではいじめられる子どもも多く、ここに来るといろいろな国から来ている子や日本人の大人もあり、子どもたちは安心して過ごすことが

できるようです。

ふじみの国際交流センターの役割

私たちは、ただ単に外国人を甘やかせたり、同情するのではなく、彼ら1人ひとりが自分の存在価値を認め、自信を持ち、自立するためのサポートすることが大事だと考えています。日本人に泣かされる外国人妻をこれ以上増やしてはいけません。外国人による犯罪がこれ以上起こってもいけない。夢を持ち、渡日した隣人を反日にしてはならない。そのために、日本人も外国人も心を開いて話し合うことが先決で、そのための出会い場所であり、交流の場が必要であると考えたからです。

ここで働いているスタッフは、常駐が2人のほか、ボランティアが100人ほどいます。外国人をサポートする制度が

ないので、補助金や助成金がありません。会費のほか寄付金や民間団体からの助成金、埼玉県や2市1町（富士見市、ふじみ野市、三芳町）からの業務委託費などで運営しています。運営はたいへん厳しく、スタッフはまったたくのボランティアです。こうしたなかでも活動を続けていくのは、学校にも行けない、仕事にもつけない、生活もできない外国人たちを放っておけないからです。これからもスタッフみんなで力を合わせ、多文化共生の実現に向けて、地道に根気強く活動を続けていこうと思っています。

ふじみの国際交流センター

〒356-0004
埼玉県ふじみ野市上福岡 5-4-25
TEL 049-256-4290 FAX 049-256-4291
生活相談専用電話 049-269-6450

プロフィール 1947年志木市生まれ。1988年、日本語教室開催。24時間365日外国人と日本人が交流できる拠点が必要と気づき、1997年ふじみ野市上福岡に一軒家を借りてふじみの国際交流センターを開設。